

# アートで開かれ変容する パブリックスペース

北川 フラム *Written by Fram Kitagawa*

## ファーレ立川の パブリックアート

一昨年秋、東京都下の立川市でパブリックアート展開のうえで画期的な会が催された。一九九四年に立川駅北口に誕生した「ファーレ立川」という五・九haの業務地区にある一〇四点のアート作品を維持・管理するために、立川市と立川市商工会議所、この地区のビル会社、そしてボランティア・ガイド・チーム「ファーレ倶楽部」がつくった「ファーレ立川アート再生委員会」の発会式である。

このように多様なレベルの組織がパブリックアートを維持するための仕組みをつくったのは世界的にも珍しい。それだけではなく立川市は、美術館という「箱」の建設を目指さず、「街全体を美術館に！」というコンセプトのもと、今後、この地域に建設される公共の建物、企業の建物にパブリックアートの導入を誘導していくというのだ。ちなみに、先ほどあげた「ファーレ倶楽部」は一〇年にわたってアートのガイドを行い、清掃やワークショップをやってきた主婦中心のボランティアグループである。

ファーレ立川のパブリックアートは、それまで美術館の展示の延長線上にあった屋外の彫刻作品や、施設利用者の最大公約数にあわせたデザイン的な立体作品が中心だった。パブリックアートの考え方を変えたものとして評価され、二〇〇三年にイギリスはプリストルで開催された世界都市計画学会での基調報告のテーマにもなっている。都市はその成員プラス訪れる人、その中の建造物や活動を含めた「つぼ」であり、その重要な構成要素でもあるアートも、人間の化身として多種多様でありたい、という考え方は、それまでのオフィシエ的モニュメント志向とは全く違う考え方で、ファーレ立川の



ニキ・ド・サンファルのベンチ(ファーレ立川) 写真:安齊重男

アートプロジェクトは、パブリックアートの世界的潮流の源泉となつてきているようだ。

私は、この街のパブリックアート計画にコンペで選ばれて関わることになったが、そこで考えたのは、その場所で何かを感じ、そこでの体験が記憶に残る、そんな街をアートが関わることによつてできないか、ということだった。多くの人が今、この瞬間を生きて、この地球にあることを感ずることのできる街。その結果、「世界を映す街」というコンセプトが生まれ、考え方も民族的出自も異なる三六カ国九二人のアーティストが参加することになった。

フェアレ立川がある地区は、大正一〇年以来、日本を代表する空港として敗戦まで使用されてきた。以来、一九七七年まで米軍基地となり、その返還後、広大な土地の大半は、昭和記念公園と国の施設が入る業務核都市として構想されるのだが、もうひとつ、緊急事態時には首相官邸以下のライフルイン指揮系統の司令塔が機能するようつくられていた。そのほんの一部、五・九haがオフィス、ホテル、デパート、映画館、図書館などで構成される一一棟のビルが密集したエリアである。近くに広域防災基地があり、飛行場があるため、建物は五三〇の高さ制限がある。それまでのパ

ブリックアートが置かれていた公園や広場は計画にはなく、全体の容積は一〇〇m、高密度で圧迫感があり、道路に囲まれていて、三・五m壁面が後退して建物がある。こういう条件の中で、道路を活かし、建物の設備的機能をアート化することによつて、一〇〇か所以上の美術作品の設置場所を確保したのである。「機能（ファンクション）を美術（フィクション）に」がこの計画の手法になった。

換気口、排気塔、機械搬入口、街灯、看板、車止め、ベンチ、連結送水管、散水栓、建物のデッキスペース、ペDESTリアンデッキの擁壁、ドライエリア、バサージュール、車路壁、舗石、給油口、ゴミ集積所、建物の隙間、サイン、案内板、地下出入り口、オープンカフェテラス、支柱、ツリーサ



ロバート・ラウシェンバーグ 駐輪場のサイン(フェアレ立川)  
写真:安齊重男

ークルといった街の機能は、ことごとくアーティストたちによつて美しいもの、気になるもの、不思議なものに変えられていった。ビルの合間を縫うように設置された世界中のアーティストによる一一〇点に増えたパブリックアートは、再開発によつてできた新しい街を「驚きと発見の街」に変容したのである。人びとは、あるいはマップを手に作品を探しながら街を歩くことで街に親しんでいくのである。アートがあることで、時間の蓄積のない、空間に襲のない、新しい街が豊かになるのだ。フェアレ立川は、基地のまち「から、アートのまち」へと立川市のイメージを大きく変えたのである。

アートは人と人、人と場所をつなぐ。先述の「フェアレ立川アート再生委員会」は、アートを介して多様な人びとがまちづくりに参加してきた一〇余年のひとつの成果であり、人びとは、「今、ここ」という場所に根をおろしながら、人間の化身ともいふべき世界のアーティストの作品に関わることで、同時代のより普遍的な世界へと開かれていったのだと思う。

## 大地の芸術祭 越後妻有 アートトリエンナーレ

フェアレ立川は、東京近郊の再開発によつてできる新しい都市空間が舞台であったが、次に紹介する越後妻有でのアートプロジェクトは、



マリーナ・アブラモヴィッチ(大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ)  
写真:安齊重男

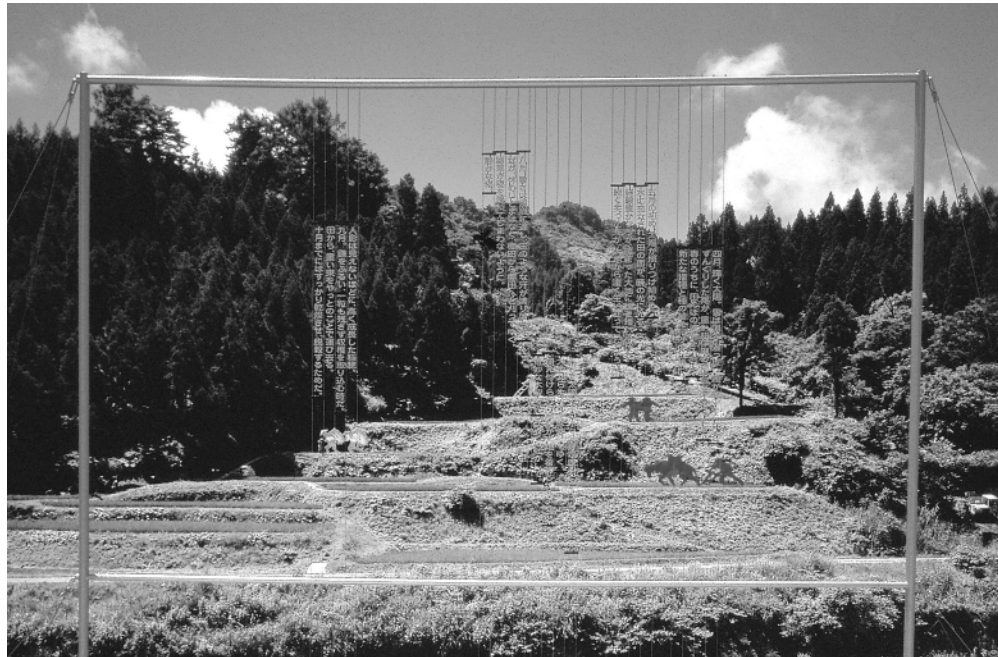
それとは全く対極の、農村の過疎地域での取り組みである。

越後妻有地域は長野県に隣接する新潟県南端に位置し、十日町市と津南町からなる。世界有数の豪雪地帯であり、東京二三区より広い面積七六〇km<sup>2</sup>に人口七万四千人という過疎地域である。その里山を舞台に、三年に一度、自然とアートと人間の三年大祭「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が二〇〇〇年から開催されている。すでに三回を終え、二〇〇九年の第四回に向けた準備が進んでいる。

そもそもこの芸術祭は、新潟県が進めてい

た、新たな広域地域づくりプロジェクト「ニューにいがた里創プラン」のひとつに十日町市広域が一九九六年に指定されたことに端を発する。越後妻有は、効率一辺倒の時代の中で、過疎化、高齢化、国による農業の切り捨てによって、先祖から長く続いた地域と生活、文化そのもののアイデンティティを喪失し、自信と誇りを失っていた。しかし、地球環境問題が深刻化し、文明の曲がり角にある今こそ里山に着目し、他者との関わりの中から再度土地と生活に誇りをもつことが大切だという気運も生まれてきた。地域がもつさまざまな価値を、アートを媒介として掘り起こし、その魅力を高め、自立へ向けた礎を、一〇年をかけて築いていくという「越後妻有アートネットワーク整備事業」が策定され、大地の芸術祭は、その牽引役として、また三年毎のお披露目の場として構想された。

アートはひとつの、しかし強力な方法である。アートの場を見せる力、場を甦らせる力、人と人、人と場をつなげる力は、私がファール立川の仕事で確認したことだ。だが、千五百年にわた



イリヤ&エミリア・カバコフ(大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ) 写真:安齊重男

つて農業を通して大地と関わってきた越後妻有では、その場の力が圧倒的に大きい。ある意味、ファール立川では場の力、場の固有性を創りだすためにアーティストの参加を求めたのに対し、越後妻有ではそこに流れる固有の時間、厳然とある固有の空間をいかに発見し、感応するかがアーティストに求められているのだ。

そして、その「場」こそが、ファール立川とは異

なる「公共」の新たな可能性を越後妻有で開示してみせたのである。フーレ立川が「道路」という公共空間を中心に展開されたのに対し、越後妻有では、田んぼや民家といった「他者の土地」あるいは「他者の財産」といった「非・公共空間」をその作品の展開場所に行っている。アーティストがある場所で何かをつくらうとした時に、その場の所有者、関係者の了解をとらねばならない。地元の人々は、最初は猛反発をする。そこでアーティストは自分が作品をつくることに対して、「コミュニケーションをとらざるを得ない」、都市の中のアラカじめ与えられた場所ではない場面でも、どうするかを考えざるを得ない。アートと一言いった瞬間に起きる大反対の合唱が、その反対を梃子てこにすることで、深々と地域の歴史、コミュニティ、文化を考えるきっかけとなった。その批判と疑問に対する「コミュニケーションを通して、お互いに理解ができ、全く異質な人びととの協働作業を生んだのである。他者の土地で作品をつくらうとする時に起こる反感、批判、拒否から、やがて学習、理解、協働に至るプロセスの中で、私有にまつわる排他

性が壊れ、地元と作者、あるいは協力者のあいだに「公共性」が生まれたのである。違う人間の頭脳に生まれる案が、他者の土地に植えられ、育つことは、まさに私たちを隔てている「私有」を越えていくことなのだ。ここで私たちは、パブリックアートとは、パブリックな場にあるアート」だけではなく、「場をパブリックに変容するアート」、そして協働によって、パブリックを巻き込むアート」「パブリックをつくりだすアート」であることを知るのだ。

アートを道標みちしるしに里山を巡る旅は、「暑い、蒸し暑い、広い、疲れる」「でも気持ち爽やかになる。そこにいるお年寄りの喜びを見ると元気になる。温泉もあるし、食べ物がい」という口コミが広がり、三〇万人を超える人を引きつけた。訪れた人びとは、足に返ってくる土の弾み、濃密な草イキレのニオイ、風の爽やかさを一人ひとりの身体で感じ、五感を開放していった。パブリックアートは、人びとの身体というきわめてプライベートな空間をも開く可能性をもっている。

大地の芸術祭は、当初は三回の開催の予定

であった。しかし、二〇〇六年の第三回終了後、住民、サポーター、アーティスト、妻有ファンの人びとの熱い要望を受けて、第四回以降の開催も決定した。まさに、「パブリック・オピニオン」世論」が行政を動かす、地域に新たな局面を開いたのである。

今、二〇〇九年の開催を目指して地域・ジャンル・世代を超えた人びとのさらなる協働が始まっている。

□ 北川 フラム(きたがわ・ふらむ)

アートディレクター、株式会社アートフロントギャラリー代表、女子美術大学芸術学部芸術学科教授。新潟市美術館館長、大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ総合ディレクター。一九四六年新潟県生まれ。東京芸術大学美術学部卒業。国内外の美術展、企画展、芸術祭を多数プロデュースする。著書は『希望の美術・協働の夢 北川フラムの40年 1965-2004』(角川学芸出版)ほか。